



松井ニット技研

美しく絶妙の配色、ふんわりとやさしい手ざわり、ニューヨーク近代美術館（MOMA）のミュージアムショップでも圧倒的な人気を誇る「マルチカラーマフラー」は桐生の中心市街地に工場を構える㈱松井ニット技研（松井智司社長）が生み出す製品である。

同社の創業は明治40年（1907）、銘仙機屋としてのスタート。戦時中は企業整備により廃業となり、中島飛行機関連のスプリング工場となった。戦後の昭和23年（1948）に松井社長の父親が亡くなり、母親がニット業に活路を求めて、同25年（1950）に中古のラッセル編機を導入したのが松井ニットの発祥となった。靴下やトリコットなどの編み立て業から、数年後、ラジオドラマ「君の名は」でヒロインが着用した「真知子巻き」が流行、マフラーが爆発的な人気となり、同社のマフラーやストールの生産が大きく伸展した。

その後、対米輸出のマフラーや帽子、ベストなどの量産品が好調だったが、1970年代の日米繊維交渉による輸出規制や円高の影響で不振に陥り、岐路に立たされたという。松井社長は同50年（1975）に商社に勤務していた弟の敏夫氏を専務に迎え、松井ニット技研を設立、国内市場に重点を移し、イッセイミヤケやコムデギャルソンなどのデザイナーズブランドのOEM生産に取り組んだ。「コムデギャルソンの川久保玲氏もよく工場に来られました」と松井社長。ブランド品のOEM生産の経験が今日のブランド力のある松井ニットの基盤となった。

自社ブランドの確立を目指し、TPS（テキスタイルプロモーションショー）での商品開発、ジャパンクリエイションへの出展などを重ねた。MOMAのエージェントが訪ねてきたのが平成11年（1999）のこと。翌年から「マルチカラーマフラー」のミュージアムショップでの販売が始まり、五年連続で売れ筋ナンバー1を記録、松井ニットは世界に名を知られるようになった。

昭和30年代の編機は手づくりに近いゆっくりとした速度で稼働し、ソフトで弾力に富んだ風合いに仕上がる。独自の配色は織物産地で育んだ豊かな感性と印象派の絵画や芸術作品から得たインスピレーションを加え、他にまねの出来ない製品となっている。

平成17年（2005）には念願の独自ブランド「KNITTING IN」を設立、美術館や高級ホテルでの販売も好調だ。さらに女性用ゴルフウェアを開発するなど、常に新分野に挑戦している。

（写真は松井ニット技研工場内、松井智司社長◎と松井敏夫専務◎）

●場所／桐生市本町四丁目甲85

●電話／0277-44-3518

世界的評価のニットマフラー
丹精を込めてゆっくりと編む